



毎年、10月に入ると、京都国際会館で、Regional Action on Climate Change(RACC)という国際シンポジウムが開かれます。これは、1000人以上の科学者や政府関係者、民間企業の人たちが世界各国から集まって3日間開かれるSTS(Science and Technology for Society)フォーラムの前日に行われます。RACCは今年で10回目ですが、地球研は、当初から国立環境研究所(NIES)、地球環境研究戦略機構(IGES)、海洋研究開発機構(JAMSTEC)、文科省、環境省などと共に、共催機関となっています。今年は、100人以上の参加があり、世界を代表する研究者や、Future Earthなどの国際プログラムや国際機関の代表9人が話題提供を行った後、活発な議論が行われました。今年は特に、気候変動に対処する適応には、地域での取り組みを、学際、および社会の様々なコミュニティと進めることの重要性が、会議全体のトーンとなっていました。

この中で、スイスから来られたAlexander J.B. Zehnder教授が、「(特に環境問題、気候変動問題などについては)自然科学者が問題を作り、社会科学者が問題を解いている。」という面白い言いかたをされていました。ここでいう社会科学は、氏の発表を聞くかぎり、政治学、経済学だけでなく、工学や農学など、現実の社会の問題を扱う、いわゆる実学の分野のように感じられましたが、人文(科)学は入っていないようでした。私が「面白い」と思ったのは、自然科学者は「問題を作る」という言いかたでした。自然科学者は(興味の趣くままの)現象解明に興味を持つという言いかたは、よくされていますが、その結果、実は人間社会に様々な問題を作り出している、という指摘です。確かに、「地球温暖化」問題も、自然科学者が営々と観測し、過去のデータを調べたりした結果、分かってきた問題です。大気・水汚染、オゾンホール等々、すべて自然科学者が「興味本位で」測ったり調べたりした結果、「環境問題」として出てきたわけです。その問題を、広い意味での「社会科学者」は、解こうとしています。ただ、問題を解決するためには、答えはどうあるべきか、の指針が要るはずですね。その指針はだれが出すのでしょうか。「人はどうあるべきか」を考究してきた哲学や倫理学などを含む「人文学」なのでしょうか。ただ、これまでの大部分の人文学の大きな問題は、人や人間社会(のあり方)のみに特化した学問となっており、「人と自然」という視点では進めてこなかったことです。現在、地球研に滞在されているオーギュスタン・ベルクさんの「風土学(mesology)」はまさにその視点での学問です。人類が地球の自然そのものを大きく変えてしまった「人類世(人新世)」と言われている現在、問われているのは、新しい「人と自然」のあり方ではないでしょうか。自然科学は、「あり方」とか「あるべき姿」は禁句として発展してきましたが、自然科学、社会科学、人文(科)学の垣根を超えて、「人と自然のあり方」を考え、さぐっていかねばなりません。地球研は、まさにその学問分野を創っていく研究所である、と私は理解しています。

「人と自然」の関係性について、私が初めて考えるきっかけとなったのは、大学院博士課程の3年間、延べ1年間以上過ごしたネパールヒマラヤでの体験でした。ヒマラヤの気候と氷河の研究プロジェクトに参加しながら、チベットから来たシェルパ族などはなぜ厳しい自然環境のヒマラヤ高地で暮らし続けているのか。あれから40年、ヒマラヤは「地球温暖化」の影響をもちに受けているホットスポットのひとつにもなっています。多くの氷河は後退・縮小する一方、氷河末端には解け水の拡大による氷河湖が形成され、下流の村々は危機に晒されているとも言われています。一方でグローバリゼーションの影響は、標高5千メートルの山奥にも深く浸透しているとも言われています。今回、少し時間をいただいて、現在のヒマラヤの「人と自然」を垣間見て、そのあり方を再考したいと思っています。